



之日
夕
五月
日發行
翌日
祭服日
書店
新刊
新書
城
書
五
月
七
日
昭和八年五月七日

仁中雜記

島田忠夫

○はしがき

この文章は、いま旅へ出る前に、そそくとして書き綴るのである。それ故極めて簡単にかく。

一、堺鳥の會

山村暮島先生が亡くなられて十年になる。こんど水戸に『堺鳥の會』が生れた

が生れたのは、茨城牛久

沼の書人小川芋錢老の肝入

りである。

四月二十三日の午前十一時から水戸の小松屋旅館に於て開會された。出席者は

暮島先生の未亡人と令嬢、

小川芋錢老、日赤病院長

茨城病院長の鈴木剛次郎氏

いはらき新興社の關孤圓氏

洋畫家齊藤太郎氏、助田

小學校長沼田成彦氏、津川

氏小生たち凡そ十二三名であ

る。晝食を共にして午後四時散會、この間に暮島君集の

中の詩を朗讀したり、追憶

される。すべて小川芋錢老

は引つづいて、毎年春秋催

され。すて小川芋錢老

はいい會である。會の仕事

もいろいろ相談した。

尚・發會式の席上、書帳

に參會者がみなそれ等

○はしがき

○島の娘謡ふ通るだみ聲も、何やら春の宵ら

しきかな

○島の娘謡ふ通るだみ聲も、何やら春の宵ら

しきかな

吉岡獨歩

若松耕人

抱村

○花に醉ひて唄謡ふほど放膽、氣分になれぬ

我をあはれむ

早春短唱

川口直樹

春よ、又やつて來たか

枯れなつきをうんと燃

やさう

春はまだ、ながいから

野原は鶯でつゝまれ

沼の水はもう温んだのに

やさう

蛙は未だねむつてゐる

野原だ、青い野原だ

やさう

春はまだ、ながいから

野原は鶯でつゝまれ

沼の水はもう温んだのに

やさう

蛙は未だねむつてゐる

野原だ、青い野原だ

やさう

春はまだ、ながいから

野原は鶯でつゝまれ

沼の水はもう温んだのに

やさう

春はまだ、ながいから

野原は鶯でつゝまれ

沼の

